

信頼しない罪

サムエル記上13章1～14節
2022年5月1日
松田 基子 師

神様は私達人間に、命と使命を与えて、この世界に送り出された人間の創造主ですが、神様は人間を他の被造物とは違って、神様との愛を築き合う存在として創造されました。その関係は、人間が神に叛(そむ)いて後も、変わる事はありませんでした。人間が神様に叛いた原因の一つは、神様への疑いでした。

ですから、神様はご自身を疑うことを、最も悲しみ、嫌われます。聖書を読んで、神様が人間に一番求めておられることは、何だろうかと考えた時に、それは、神様に対する**絶対的な信頼**であることが分かります。神様は罪に滅び行く人類を救い出す、人類救済のご計画をお立てになりましたが、その計画に選ばれたのは、神様の呼びかけに対して、神様に信頼し、自分の全存在をもって応答し、従ったアブラハムでした。

そのアブラハムについて、ヘブライ人への手紙、11章1節には、

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、
見えない事実を確認することです」

と前置きをして、8節に、

「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです」

とあり、そこには神様に対する全き信頼がありました。

ここから分かりますことは、神様は私達人間に何を求めておられるのかというと、それは、

『神様に対する、絶対的信頼である』

と言う事が分かります。信仰について、キリスト教神学事典には、次の様に説明が成されています。

「信仰とは、自らの行為によって、御自分を啓示される神の現実、力、そして、愛に対する確信に満ちた従順なる信頼のことであり、それらが将来成就、完成されるのを待ち望むことである」

とあります。神様が人間を創造されて以来、私達人間に求めておられることは、

『神様への従順なる信頼、信仰です。』

私達キリスト者の人生の戦いは、この一事にあると言えるでしょう。キリスト者の**人生の戦い**は、**自分の不信仰**との戦いです。

さて、先週はサムエル記上の8章から、イスラエルの民が当時、先見者(後代の預言者)とか、裁き司(士師)と呼んだ指導者サムエル(最後の士師)に対して、彼らはイスラエルを圧迫するペリシテ人の軍事力の脅威に備えて、自分たちにも、周辺諸国のように、兵士を訓練し、戦いの陣頭に立って国を守る王を立てて欲しいと求めた事に付いて学びました。この事はイスラエルの民が、

『目に見えない神様に頼る事は心許ない』
と言う、**神様への不信**から起こったことでした。人間は神様に対しても、自己中心で、我を通します。人間は痛い目に遭わなければ、自分の非を悟ろうとはしません。

神様はイスラエルを忍耐し、憐れみ、サムエルに、ベニヤミン族キシユの子サウルに、神様が彼を王に選ばれた印の、油注ぎをするように命じられました。サウルはアンモン人のギレアド侵攻通告を聞くと、神の霊に燃やされて、全土から兵を集め、アンモン人の陣営に突入し、勝利することができました。サムエル記上11章14節には、

「サムエルは民に言った。

『さあギルガルに行こう。

そこで王国を興そう』

とあります。ギルガルはエフラエム山地ベテルの北、11kmの地点にあり、後々有名な聖所となった所であり、サムエルが巡回した聖所です。

11章15節で、

「民は全員でギルガルに向かい、そこで
サウルを王として主の御前に立てた」

とあります。

しかし、サムエルにとって、イスラエルの王は飽くまでも、主なる神様ですから、その願いは、イスラエルが何よりも、

『神様に聞き従うことでした。』

そこで12章13節で、

「今、見よ、あなたたちが求め、選んだ王がここにいる。主はあなたたちに王をお与えになる。だから、あなたたちが主を畏れ、主に仕え、御声に聞き従い、主の御命令に背かず、あなたたちもあなたたちの上に君臨する王も、あなたたちの神、主に従うならそれで良い」

と言っています。この様にして、サウルはイスラエル最初の王になりました。13章1節に、

「サウルは王となって、一年でイスラエル全体の王となり、二年たったとき、イスラエルから三千人をえりすぐった。その内の二千人をミクマスとベテルの山地で自らのもとに、他の千人をベニヤミンのギブアでヨナタンのもとに置き、残りの民はそれぞれの天幕に帰らせた」

とあります。

イスラエルにはそれまで、常備軍は組織されていませんでした。軍人と呼ぶに相応しい、戦闘技術を専門的に身に付けた人はいなかったのです。サウルはアンモンと戦った人々の中から、体格が良く、勇敢で強そうな男子、三千人を選んで、彼らを、兵士に育てることにしました。その内、二千人をベニヤミン領ミクマスとベテルに配置しました。サウルの息子ヨナタンは勇敢で、戦闘技術にも長けていました。サウルは彼に、選りすぐりの千人の兵士を託し、ギブアに配置しました。ところがこのヨナタンは、ペリシテ人の守備隊に対して、先制攻撃を掛けたのです。その結果、ペリシテ軍は、イスラエルと戦うため

に集結しました。5節には

「その戦車は三万、騎兵は六千、兵士は海
辺の砂のように多かった」

と記されています。この戦車三万と言うのは、他の訳では三千となっています。それにしても人間的に見るなら、規模の違いは歴然としていて、イスラエルが勝てる見込みはありません。ペリシテ軍は、イスラエルとは比べ物にならない大軍で、装備してやって来ました。

サウルがミクマスの陣営を後退させると、ペリシテ軍はミクマスに陣を敷きました。戦力の圧倒的な違いに、イスラエルの戦意は失われ、兵士達は自分の身の危険を感じて、逃げ出して行きました。それはイスラエル全土へ、民衆に波及しました。6節を見ますと、

「イスラエルの人々は、自分たちが苦境に陥り、一人一人に危険が迫っているのを見て、
洞窟、岩の裂け目、岩陰、穴蔵、井戸などに身を隠した」

とあります。

とどまる事に不安を感じた人々は、少しでも遠くへと、ヨルダン川を渡り、ガドやギレアドの地に逃げのびた者もいました。不安がイスラエル全体を覆う中で、サウルは自分が王に即位し、また、大切な聖所があるギルガルに、踏みとどまりました。そのサウルに従って、踏み止まっていた兵士もいましたが、皆、サウルの後で恐れおののいていました。サウル自身不安の色を隠せませんでした。この苦境に立たされたサウルが、一番求めたのは、年老いても尚、神様の力を得る事が出来る、サムエルの存在でした。

『一刻も早く、サムエルに来て貰い、神様への犠牲を献げて貰い、神様の助けを得たい』その一心でした。

しかし、サムエルは7日後でなければ来ない事になっています。サウルの陣地から谷を挟んで、ミクマス峠の向こうに、ペリシテ軍は大軍を成しています。今にも攻めて来そうです。

恐れをなしたサウルの兵士は、1人また1人と逃げ出して行きます。サウルは一日千秋の思いで、サムエルの来訪を待ちました。約束の7日目、サムエルの姿が、今現れるか今現れるかと、目を凝らして見入っていましたが、サムエルの姿は現れませんでした。

8節を見ますと、

「サウルは、サムエルが命じたように、7日間待った。だが、サムエルはギルガルに来なかった。兵はサウルの下から散り始めた」とあります。サウルは、この現実に限界状況でした。9節を見ますと、

「サウルは、

『焼き尽くす献げ物と、和解の

献げ物を持って来なさい』

と命じて、焼き尽くす献げ物をささげた」

とあります。当時の戦いは、その民が信じている神と神との戦いだと考えられていましたから、出陣する前に、神様に、最も大切な、焼き尽くす献げ物を捧げて、神様のご加護と助けを求める事が、最重要事でありました。サウルはこれ以上兵士が減っては、戦えない。1人でも多くの兵士を食い止めて、何時でもペリシテ軍を迎え撃つ用意をして置かなければとの、焦る気持ちを抑えることが出来ずに、サムエルが捧げるべき燔祭に手を出してしまいました。

10節に、

「焼き尽くす献げ物をささげ終えた

そのとき、サムエルが到着した。

サウルは彼に挨拶しようと迎えに出た」

とあります。サウルの、

『しまった』

と言う狼狽ぶりが想像されます。サウルは直ぐに言い訳を考えました。一方11節に、

「サムエルは言った。

『あなたは何をしたのか』

とあります。サムエルには、サウルが既に、サムエルが執行すべき、全焼の献げ物を、越権行為で、捧げてしまった事に気が付きました。

サウルは、サムエルに叛いたばかりではなく、神様に叛いたのです。

サウルの苦しい言い訳が始まりました。

「サウルは答えた、

『兵士がわたしから離れて散って行くのが目に見えているのに、あなたは約束の日に来てくださらない。しかも、ペリシテ軍はミクマスに集結しているのです。ペリシテ軍がギルガルのわたしに向かって攻め下ろうとしている。それなのに、わたしはまだ主に嘆願していません。わたしはあえて焼き尽くす献げ物をささげました』

と、サウルは責任の一端は

『サムエル、あなたにある。あなたが約束を守らないから仕方がなかった。それに、状況は待てる状況ではなかった。それを分かって欲しい』

と、サウルは一生懸命に弁解しているのですが、実はサウル自身が、根本的な自分の問題に気付いていません。

それは、彼に欠けている一番大事なことは、目の前の事に心奪われるばかりで、神様への**信頼が無い**と言うことです。全焼の犠牲を献げることによって、如何にも神様に寄り頼んでいるかに見えますが、それは彼自身も言っている通り、兵士が離れて行く、彼らを食い止めるためであり、また、神様の助けは確かに欲してはいるものの、そこに**神様への全幅の信頼**は見られません。

『自分達の主なる神様は、奴隷であった先祖たちを、強大な戦力を誇るエジプト軍から助けだして下さったお方であり、このお方がイスラエルを、ご自身の民として下さっているのだから、この神様が必ず勝利される』

との、神様への信頼が、サウルには、その根本にありませんでした。

神様への絶対的信頼があれば、サムエルが幾ら遅れようと、待つ事が出来た筈です。待て

なくて自分で手を出してしまった、その事こそ、神様への信頼がない、

『自分で何とかしなければ』と、神様を侮っている姿の現れです。

一方サムエルは、その事に気付いていました。13節に、

「サムエルはサウルに言った。

『あなたは愚かなことをした、あなたの神、主がお与えになった戒めを守っていれば、主はあなたの王権をイスラエルの上にもいつまでも確かなものとしてくださっただろうに。しかし、今となっては、あなたの王権は続かない。主は御心に適う人を求めて、その人を御自分の民の指導者として立てられる。主がお命じになったことをあなたが守らなかったからだ』

と言い渡しました。

しかし、サウルはサムエルのこの言葉に、心砕かれて、神様の前に悔い改めることはありませんでした。そんなサウルに対して、サムエルは、彼の許から立ち去り、主の御心に適う人物を求め始めるのでした。この様なサウルであるにも拘わらず、神様はこのペリシテ人との戦いをサウルの息子ヨナタンによって、勝利に導かれるのです。ヨナタンは、父サウルに似ない子でした。14章6節に、

「ヨナタンは自分の武器を持つ従卒に言った。

『さあ、あの無割礼の者どもの先陣の方へ渡って行こう。主が我々二人のために計らってくださるにちがいない。主が勝利をえられるために、兵の数の多少は問題ではない』

と言って、神様に全信頼して出て行ったことがイスラエル軍に、勝利をもたらせました。

ところで、神様は当初、サウルに期待して、サムエルを通して、彼に油を注ぎ、イスラエルの初代の王とされましたが、サウルはいつも自分

で問題を解決しなければと言う思いが強くて、神様に聴こうとしませんでした。そのために、神様に信頼して、神様の最善を信じて待つと言う事が出来ませんでした。サウルはその事が自分自身を苦しめ、人を信頼することが出来なく成り、ダビデに対しては、激しい嫉妬心を抱きました。

サウルの生き方を通して、神様に信頼しない人生が、如何に不幸な人生であり、また、神様に対する大きな罪であるかが示されます。私達もサウルと同じ心を持っています。不信仰な心が起こって来る度に、御子をさえ惜しまずにお与え下さり、御救いに招いて下さった、神様の大きな愛に立ち帰りましょう。そこが神様への絶対的な信頼の拠り所です。信仰とは、人生の幸不幸ではなく、私の存在の全てを保証して下さい、命の与え主である神様に、自分の全存在を委ね、信じ抜いて行くことです。心に起こって来る不信仰を追い出し、神様に全信頼して、地上の旅路を歩み抜いて行こうではありませんか。

お祈りを致します
憐れみ深い天の父なる神様

あなた様に愛され、生かされていながら、目の前に起こる様々な出来事に振り回され、ご自身の愛を疑う不信仰をお許し下さい。

如何なる時も、御子イエス様を十字架に架けて迄、御救いをお与えくださった、父なる神様のご愛を寸分疑うことなく、唯々ご自身に信頼し、ご自身を仰いで地上の旅路を歩み抜く者と成らせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。 アーメン。